

吹屋の食材で新製品が続々



佐藤商店 佐藤 拓也さん

吹屋で採れる食材を使って、柚子胡椒「吹屋の紅だるま」、柚子酢「吹屋の紅てんぐ」、トウガラシを焼酎に漬けた「吹屋のからみ」、おかず味噌シリーズの第一弾「にんにく味噌」を製造、販売しています。

原材料の供給が安定しておらず皆さんの要望に応えられないという課題もありますが、おかげさまで販売は順調です。

味はもちろんですが、パッケージにこだわって、キッチンで映える「食べる雑貨」を意識して作っています。皆さん、ぜひご賞味ください。

特産品 開発



吹屋の紅だるま

高校生が考えた

高粱名物のお弁当



高粱城南高校の皆さん

高粱城南高校の4つの学科による「城南モザイクプロジェクト」の一環で「地域との協働による生徒参加型地域貢献活動」として、観光弁当が開発されました。

環境科学科の3年生がレシピを担当した弁当には、トマト、柚子、備中牛といった高粱市の特産品に加え、同校で育てているヒラタケも食材に含まれています。

弁当作りのポイントや衛生面の知識や技術を教授したおぐる鮮魚店(巨瀬町)が製造を担当し、いよいよ10月1日(日)、ヒルクライム大会のチャレンジ縁日で販売されます。

弁当

美術館がつくった

まちのランチマップ

成羽美術館 渡辺 浩美さん

ガイドメ

来館者に食事どころを聞かれるたびに、分かりやすく魅力的なガイド冊子の必要性を感じていました。せっかく高粱に来ていただいたのだから、「見る(美術館)食べる(ランチ)買う(特産品)」の3つの情報を揃えて、一日高粱を楽しんでいただけるという気持ちでした。

「正確なお店情報」という面では、掲載全店に現状確認などとして細心の注意を払いましたが、「見て楽しい、使いやすい」をテーマにスタッフ皆がまちを再発見しながら楽しんで取り組めたことが良かったです。

美術館の役割には、まちの魅力を伝えることも含まれていると思うのです。成羽美術館を目指して高粱に来られるという方も多くいらっしゃると思いますので、そういう方には高粱の他のスポットに寄って

美術館がつくった

成羽美術館にいらっしゃった方々にも成羽美術館に興味を持っていただきたいという思いから、美術館がある成羽町だけでなく、高粱市街地や落合町を中心に、たくさんのお店を掲載しています。

優しい色合いの手描きイラストがポイントで、来館者にお渡しするときもかわいくて分かりやすいと好評です。このランチマップは高粱市図書館内の高粱市観光案内所などに置かせてもらっています。街歩きガイドとしても多くの方が手に取ってくださっているようで嬉しく思っています。

これからも食べ歩きを続けて、いづれまた進化したランチマップをお届けしたいと思っています。



イラストを担当した 成羽美術館 吉尾 梨加さん



インバウンドってなに？

インバウンドとは、外国人が訪れてくる旅行、あるいは、訪日する外国人観光客のことです。国土交通省などが平成15年に開始した「ビジット・ジャパン・キャンペーン」で使われたことで一般的になった外来語とされています。

キャンペーン開始前年、平成14年の外国人旅行者数は524万人でしたが、数年間は世界的な不況の影響で伸び悩んだものの、平成25年に初めて目標値だった1千万人を超えると、平成27年には2千万人直前の1974万人を記録しました。

岡山県、高粱市でも外国人旅行者数は増えており、言語だけでなく、文化や宗教の違いに対して柔軟な対応を求められるようになっていきます。



備中松山城の登り口、城町ステーションに貼ってある英語・中国語による案内シート

備中高梁駅では

ITを使ったインバウンド対策

JR西日本岡山支社の主要22駅に53台のタブレット端末を設置しており、備中高梁駅もこれに含まれています。また、乗務員(車掌)は全員携帯しており、伯備線でも同様です。

タブレット端末には、お客様の案内に役立つアプリや電子化した案内ツールが入っており、機動的に活用しています。特に、備中高梁駅でも年々増加傾向にある、海外からのお客様への案内には効果を発揮しています。

備中松山城や吹屋ふるさと村などへのアクセス方法のほか、駅や列車、時刻や乗り換え案内など、さまざまな情報を伝えています。

また、輸送障害時におけるお客様への情報提供にも活用できるようになっています。



JR西日本 備中高梁駅 徳永 さやかさん (協議会員)

高粱知るふふれ



知るふふれは「高粱を知る」と「シンプルプレ」(フランス語で「よろしければ」)をかけた言葉です

高粱市の観光産業の発展のために、市役所だけでなく、多くの市民の皆さんも力を尽くしてくれています。私は、市と観光業のコラボレーションである「観光戦略アクションプラン」に注目して、7月28日に同推進協議会主催で行われた「TAKAツアー」に参加しました。



さて、ツアーの参加者は例外なく「高粱の観光地巡りは楽しかった」と感想を述べた上で、「英語案内が足りない」「宿泊施設が足りない」「県内ツアーや、空港から出発するバスツアーに高粱を入れたら行きやすくなる」「地域の伝統や自然に親しむ体験をやってみよう」など、貴重な意見をいただきました。

外国人の視点から見られた高粱の印象は非常に参考になりますし、高粱の魅力を発信する戦略を考えたり、地域をさらに活性化するための大切な一助となるでしょう。あなたも、高粱の魅力の再発見やそのPRについて、じっくり考えてみませんか？



ツアーの後のミーティングでは、活発で貴重な意見が聞かれました



県内などに住むアメリカ人やイタリア人、オーストラリア人らが参加して、吹屋のまち並みを散策